

肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児の自立活動の指導理論・技法に関する全国調査(1)

○姉崎 弘 (常葉大学教育学部) 藤澤 憲 (和歌山県立和歌山さくら支援学校) 桃井克将 (徳島文理大学保健福祉学部) 井上和久 (大和大学教育学部)

KEY WORDS: 重度・重複障害児、自立活動、指導理論・技法

I. 問題と目的

肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児の自立活動の指導内容・指導方法に関しては、村田(1993)、宮崎(1999)、香野(2002)、中井・高野(2011)、姉崎(2016)などの研究が散見される。しかしこれらの先行研究では、自立活動の指導内容の6区分26項目ごとに各々の指導理論・技法を比較して対照的な指導理論・技法を明らかにしたり、教員が最も活用している指導技法について学部間および類型間の比較をして、その特徴を明らかにした研究はこれまでなされていない。

そこで本研究では、肢体不自由特別支援学校の重度・重複障害児の自立活動の指導に関する全国調査を実施し、今後の自立活動の指導のあり方を検討する上での基礎的資料を得ることを目的とした。具体的には、以下の3点について検討を行う。(研究1)自立活動の26項目について、指導理論・技法を相互に比較し、対照的な指導理論・技法を明らかにする。(研究2)教師が最も活用している指導理論・技法について、学部間・類型間の比較をし、その特徴を明らかにする。(研究3)教師が習得した、又は今後習得を希望する指導理論・技法を明らかにする。

II. 方法

1. 調査対象

全国の肢体不自由特別支援学校262校(分校・分教室・知肢併置校を含む)を対象とした。小学部・中学部・高等部の「知的障害教育代替の教育課程」、「自立活動を主とする教育課程Ⅰ(比較的応答が豊かな児童生徒)」、「自立活動を主とする教育課程Ⅱ(比較的応答が乏しい児童生徒)」の3類型に便宜的に分け、各類型を担当する教師グループ(計9類型)を対象とした。

2. 調査期間及び手続き・回収率

2012年1月～3月。郵送法による質問紙調査を実施。質問紙への回答は、各学部の各類型で自立活動の指導に詳しい複数の教師に依頼した。262校の内157校から回答があり(回収率60.0%)、全ての都道府県の学校から回答が得られた。

3. 調査項目

調査用紙は、「自立活動の指導方法(指導理論・技法)」と「自立活動の指導方法として最も活用している指導理論・技法」に関する調査より構成。(指導内容の1区分1項目は1(1)と表記)

III. 結果

1. 各指導項目における象徴的な指導理論・技法間の比較

Table 1 有意差のある指導内容の項目をもつ指導理論・技法の組合せ

指導理論・技法の組合せ	有意差のある指導内容の項目	項目数
1 動作法—スヌーズレン	1(1),2(3),4(1),5(1),5(2),5(3),5(5),4(4)(-)	8
2 音楽療法—スヌーズレン	1(1),5(1),5(2),4(1)(-),4(4)(-)	5
3 感覚統合—音楽療法	4(1),4(4),1(1)(-),1(3)(-)	4
4 動作法—静的弛緩	5(1),5(3),5(5)	3
5 理学療法—作業療法	1(1),1(3),1(4)	3
6 作業療法—音楽療法	5(5),1(4)(-)	2

Table 1より、比較的有意差のある項目が多かったのは、「動作法—スヌーズレン」、「音楽療法—スヌーズレン」、「感覚統合—音楽療法」等の組合せであった。(表中(-)はマイナスを示す)

2. 教師が最も活用している指導理論・技法における学部間・類型間の比較

Table 2 最も活用する指導理論・技法の学部別・類型別の重視度

指導理論・技法	教師グループの回答	
	学部	類型
1 摂食訓練		重度児ほど重視
2 感覚統合	小学部ほど重視	重度児ほど重視
3 スヌーズレン	小学部ほど重視	重度児ほど重視
4 カウンセリング	高等部ほど重視	軽度児ほど重視

Table 2より、摂食訓練は重度児ほど、また感覚統合とスヌーズレンは重度児ほど、かつ小学部ほど、重視していた。

3. 教師が習得した、又は今後習得を希望する指導理論・技法

Table 3 教師が今後習得を希望する指導理論・技法の比較

順位	1999年(宮崎)	2012年(姉崎)
1	摂食訓練 153	摂食訓練 364
2	動作法 148	理学療法 359
3	感覚統合 128	動作法 340
4	静的弛緩誘導法 122	作業療法 334
5	理学療法 118	感覚統合 327
6	ボバース法 108	音楽療法 304
7	音楽療法 93	静的弛緩誘導法 276
8	作業療法 80	スヌーズレン 240

Table 3より、現場で求められる医療的またはセラピー的な指導理論・技法に関する教師の研修ニーズが高くなっている。

IV. 考察

Table 1より、動作法と音楽療法は、共に身体を動かすことで動作改善や音楽を奏でる活動であるのに対して、スヌーズレンは、主としてゆったりとリラックスして過ごし、周りの刺激を受容する活動であるため、「身体の動き」や「環境の把握」の面等で両者は対照的といえる。またスヌーズレンは身体をあまり動かせない重症児にも比較的学習しやすい活動である。

Table 2より、重度児ほど重視するのは「摂食訓練」「感覚統合」「スヌーズレン」の3つであった。特に感覚統合とスヌーズレンは、共に保有する感覚の活用に有効な方法で、今日教師のこれらの研修会への参加は不可欠であると考えられる。

Table 3より、学校現場での児童生徒の重度化・重症化の中、教師は医療的・セラピー的な指導理論・技法に関する研修ニーズが高まっている。また8位にスヌーズレンが入り、近年動きの少ない重度児に対して感覚を刺激しリラックスや主体的動作を引出すスヌーズレンの有効性が認識されてきている。

まとめに代えて、近年重度児や重症児の指導理論・技法の1つとして、スヌーズレンが新たに注目されてきているといえる。(ANEZAKI Hiroshi, FUJISAWA Ken, MOMOI Katsumasa, INOUE Kazuhisa)